

早稲田大学審査学位論文

博士（スポーツ科学）

論文概要書

観戦者の知覚する構造的制約要因が観戦行動へ及ぼす影響：

チームへの愛着と価値との関係性の検証

Perceived Structural Constraints Affecting Spectators' Behavior :

Testing the Relationship between Team's Attachment and  
Perceived Value

2016年1月

早稲田大学大学院 スポーツ科学研究科

山下 玲

YAMASHITA, Rei

研究指導教員：原田 宗彦 教授

## 【研究背景】

日本に、地域に根付いた経営方針をとる、プロスポーツリーグが誕生して、22年が経過した今、同じような理念を掲げ、ホームタウンを持つプロスポーツチームが日本のあらゆるところで誕生している。しかし、プロスポーツの観客動員数が全体で14.8%減少しているという報告や、日本プロサッカーリーグのディビジョン2の平均観客動員数も頭打ちであり、入場料収入もディビジョン1とディビジョン2の間で約3倍の差が出ている。このように日本のプロスポーツチームは、チームにとって大きな収入源である入場料収入に直結する、喫緊の課題に直面している。スポーツマーケティング領域において、一度来場したスポーツ観戦者に再びスタジアムに足を運んでもらう努力することは、重要な課題であると指摘されており（松岡, 2008）、一般的な消費者行動研究においても、新規顧客を開拓するよりも既存顧客の囲い込みをする方が、経営効率がいいとされていることから（Fornell and Wernerfelt, 1987）、本研究では、継続的観戦行動に与える要因についての検証を行った。特に、観戦行動に与えるマイナスの影響（制約要因）とプラスの影響（促進要因）の関係性を検証することで、観戦者の意思決定プロセスに新たな知見を与えると考える。

## 【先行研究の検討・研究目的】

制約要因に関する研究は、レジャー研究で多く行なわれている。その中でも、レジャー活動に継続的に参加する参加者は、制約要因を知覚していないわけではなく、制約要因は他の変数と相互に作用することによって、行動を修正すると言われている（Jackson et al., 1993）。これをネゴシエーション（negotiation）と呼び、ネゴシエーション変数や活動への動機、活動への態度的変数が制約要因と参加を媒介するとし、複数の研究が行われてきた。しかし、媒介変数を用いる理論的根拠はなく、さらに制約要因とネゴシエーション変数の関係性を細かく検証する必要があると提示されている（Son et al., 2008a）ことから、本研究は、「観戦者の知覚している構造的制約要因を明らかにし、観戦行動を促進する要因が構造的制約要因を緩和させる働きを持っているかを検証する」ことを目的とした。

## 【各研究の結果】

本研究の目的を達成するために、3つの研究（研究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）を行った。研究Ⅰでは、観戦者の知覚している構造的制約要因を明らかにし、性別・年齢・昨シーズン観戦頻度によって、知覚している制約要因が異なるかの検証を行った。なお、スタジアムでホーム試合観戦者を対象に、質問紙調査を実施し、データを収集した（n=612）。分析には、確認的因子分析、t検定、一元配置分散分析を用いた。結果、観戦者の知覚している制約要因は代替活動・ハード面・ソフト面・コスト・アクセス・コアプロダクト・天候の7因子26項目

で構成されていることが明らかとなり、性差・年齢差は確認されなかった。しかし、昨シーズンの観戦頻度を3群に分け、比較した結果、天候因子で群間に差が認められ、観戦頻度が少ないほど、天候を制約要因と知覚しやすい傾向にあることが明らかとなった。

次の研究では、観戦者の継続的観戦行動に影響する、チームへの愛着と価値、二つの観戦行動促進要因の構成概念妥当性を再検討し、研究I同様、性差・年齢差・昨シーズン観戦頻度差によって知覚している促進要因が異なるかの検証を行った。さらに、再観戦意図および累積的満足度にどちらの促進要因が、より強く影響しているかの検証も行った。データは、質問紙調査を用いて収集し (n=448)、分析には確認的因子分析、t検定、一元配置分散分析、重回帰分析を用いた。結果、観戦者の知覚している観戦行動促進要因の構成概念妥当性は担保され、男性の方が、チームへの愛着を知覚しやすく、観戦頻度が多くなるにつれて、チームへの愛着が知覚されやすくなる傾向にあることが明らかとなった。年齢差において知覚している観戦行動促進要因に違いはなく、また、価値はどの平均値比較でも有意差は確認されなかった。重回帰分析の結果、再観戦意図にはチームへの愛着が影響し、累積的満足には価値がより強く影響していることが明らかとなった。

研究IIIでは、研究IおよびIIで明らかとなった構造的制約要因と促進要因、再観戦意図との関係性を検証した。データは、スタジアムでの質問紙調査にて収集紙 (n=229)、分析には確認的因子分析、2つの観戦行動促進要因を調整変数とした、二要因分散分析を用いた。なお、交互作用の検定を行ったのち、Bonferroni法を用いて、主効果の検定も行った。その結果、チームへの愛着・価値とどの制約要因の各因子においても交互作用が検証されなかった。しかし、すべての因子において、愛着と価値に主効果が確認され、促進要因が直接的に再観戦意図を規定していることが明らかとなった。

#### 【結論】

本研究は三つの意義をもたらすと考える。一つは、スポーツ観戦者の知覚している構造的制約要因は、階層化されている可能性が考えられる。観戦者の知覚している構造的制約要因は、並列の関係になく、代替活動やコストといった、観戦に必要な時間や金銭を知覚し、次に経験値に基づくその他の構造的制約要因を認知する可能性が考えられる。二つ目は、レジャー活動はカジュアルレジャーとシリアスレジャーに分類され、スポーツ観戦はカジュアルレジャーにしばしば分類されるが、コアファンにとってみれば、シリアスレジャーであることが考えられる (Gibson et al., 2002; Greene and Jones, 2005)。最後に、スポーツ観戦そのものがシリアスレジャーの中でも、金銭や時間を要さない活動であることも考えられる。つまり、スポーツ観戦それ自体は、金銭や時間を折衝しやすい活動である。